

海猫04

001. プロローグ

——視界良好——

——高度安定——

人員輸送用大型ヘリは予定通りのコースを維持して南アルプスX地点へ順調に飛行している。

機内には十数名の海猫局員が黒殻制服に身を固め、向かい合わせのベンチに二班に分かれて座っていた。液晶ウインドウ付きの暗視ゴーグルはすでにヘルメットから下りて顔半分を覆っている。手にはショットガン式の麻醉銃や電気銃が握られ、臨戦態勢が準備されていた。到着まであと三十分はかかるかというのに、彼らの鼻息は荒いようだ。

想像するに難くない。

タフな尋問陣の軍門に下り、あの牝狸がすべてを白状したのが昨夜のこと。ここ数ヶ月に及ぶ海猫開局以来の危機が打破されたのだ。停滞を余儀なくされていた案件もこれで一気に捗ることになるだろう。

あとは牝狸が企てた謀反の根幹である証人の女子大生の身柄を捕確してしまえば、状況は完全に終息である。

両手に銃を抱えている局員の中に、一人だけ、ちがう器具を手をしている男がいた。

銃器ではない。

オタマをふたつ、バネで組み合わせたような構造のそれ——新型の猿轡だそうだ。

あのオタマで両頬を背後から挟みつけると、口腔が狭まり、舌が動かず、歯の根が合わなくなる。自害防止用であり、唾吐き攻撃などの反撃もなくなると発案者である婦女教育課は説明している。他のセクションの局員は苦笑をもってその能書きを聞いていた。たしかに、これまで使われていた猿轡が歯や歯茎に損傷を与えたり、咽喉に詰まって呼吸困難をもたらす恐れがあると指摘されていたのは事実だが、婦女教育課の真意が別にあるのは見え見えだった。この制圧具で挟まれたときの被捕確人——黒髪美人大学生——の表情こそ、彼らの目的なのだろう。

元はと言えば今回の『危機』は婦女教育課のやらかしたヘマが発端だった。若い娘へ破廉恥な搜索を仕掛け、あげく鎮圧させられずに告発され、敵対勢力の反海猫キャンペーンに利用されるに至ったのである。特務庁内における彼らの評価は最悪であり、整理解体の話まで出ていたほどだ。

言うまでもなく、くだんの女子大生への彼らの憎悪（逆

恨み)は凄まじく、通常の扱いではまったく溜飲は下がらないというわけである。

どれほどの恥辱を味わわせるか、彼らの答えのひとつがこのオタマの器具なのだ。

その姑息さ、その変執性、どうしようもないスケールの矮小さこそまさに彼らの本質だった。

紹介された名称がトドメとなる。

『断声器 (ダンセイキ)』

下劣な淫具を愛しそうにグローブで磨いている男がこの急襲部隊に参加できたのは、能力を買われたからではなく、たんに上司間の見栄争いの結果に過ぎないのである。

双発のエンジン音を轟かせる大型ヘリはやや旋回し、高度を落とし始めた。

そうそう、南アルプスまでの道すがら、野暮用をひとつ、済ませる予定があったのだった。

海猫は結構人使いが荒い部署である。

デタラメなキャンペーンをまだやらかしている不穏分子の集会場へ、大型ヘリごと『ガンを飛ばす』示威業務がそれだった。これもまた危機状況が突破された今日だから大手を振って行えるデモンストレーションといえる。だから面倒臭く感じている局員は一人もいないだろう。窓から見える眼下の様子をエンジョイすればいいだけで

ある。

アストール・ピアソラ作曲の『ブエノスアイレスの四季』から『冬』と、アントニオ・ヴィバルディ作曲の『四季』から『春』——

この二曲を巧みに構成編曲した楽曲をこの集会のために寄贈したのは、国際的女性バイオリニスト、吉成聖（ヨシナリ・アキラ）であった。

『少子国難法に反対する全国女性集会』

これが集会の名称である。

富士山麓で、元来は野外音楽祭等に使用される大会場に、集まった参加者は千人程度だから映像的には寂しいようにも感じるが、特務庁第三課治安局——通称『海猫』——による様々な妨害工作が公然と行われたことを考えれば、政権選択選挙が一ヶ月後に迫ったこの時期、この規模の集会を開催できたのは奇跡に近いとも言えるだろうか。

その時点ですでに会は成功なのだが、さらに吉成のような世界的著名人が賛同を表明し、バイオリンの生演奏まで聴かせるというのだから大成功は約束されたようなものだった。

とはいえ、微風快晴のもとスタートした集会の前半、次々に登壇したパネリスト——例えば主催者代表の一人である宇根燿子（ウネ・ヨウコ）弁護士や気鋭のジャーナリスト三輪田恵（ミワタ・メグミ）氏——が『少子国難法』の制定プロセスと予想される運用実態を講演すると、会場はその戦慄すべき事実には騒然となってしまった。

事前に主催者側がつかんでいた情報によれば、秘密警察海猫は最後までこの集会の失敗を画策しており、集会中に少しでも混乱とおぼしき状況が生じれば、それを口実に騒乱罪の適用を宣言し、大量の人員を会場内へ突入させて集会を合法的に中止解散させる腹づもりをもっているというのだから、これは拙い進行と言わざるをえなかった。

そこで応援を買って出たのが主賓ゲストであった吉成である。

彼女のミニステージは本来なら午後のクライマックスに近い時間に設定されていたのだが、それを一時間も前倒しし、怒りに興奮した参加者達の前へ、ノーメイクのジーンズ姿で登壇すると、バイオリン一本で、美しい音色を奏で始めたのである。

情熱的で複雑なリズムのピアソラのタンゴと、ヴィバルディの鮮麗なバロックの調べを、まるで時空を超越するが如く縦横無尽に弾きこなす吉成のストラディバリウス

は、怒れる群衆を理性的な聴衆へと引き戻すのだった。トレードマークである彼女の長い黒髪が涼しい山風と自らのダイナミックな動きによって波打ちなびいた。千分の一秒の誤差もなく精密なタッチを繰り返せる奏法技術は、白カットソーのシャツから伸びた、どこまでも華奢なあの両腕と指先が会得しているのだ。十代にもならぬうちから国内外のコンクールで優勝を総なめにした早熟の天才は、二十八歳の今や、押しも押されぬせぬ世界一流のマエストロの一人である。スリッパな芸術家の生活がそう強いるのか、とにかくスレンダーの体型が印象的。流れる黒髪のかすめる細面は瓜実の形をして小顔であり、一見童顔にも思えるが、しかし目鼻立ちのくっきりとした勝気性もたたえていた。才色兼備、順風満帆の成功者として活躍する彼女が、なぜにこのような反体制色の強い、治安局のブラックリストに間違いなく載る、政治的キャンペーンに率先して参加し、まるで広告塔のように先頭に立つことを厭わないのか……。

それは彼女の教養の深さ——米国の某有名大学首席卒業——と正義感の強さ——戦争孤児へのチャリティコンサートを毎年欠かさず主宰する——を証明し、同時に『少子国難法』のあまりの悪法ぶりを炙りだしてもいる。

「だって、それは自明ですよ」

吉成はローリング・ストーン誌とのインタビューできっぱりとそう答えている。

「あんな法律が成立したら、事実上、私のような働く女性はそれだけの理由で刑務所送りなのだから」

これは他人事ではなく自分の問題であると冷静な声で主張した。

四年前の第二次関東大震災を端緒にした社会と政治の大混乱は、特務庁の新設と数々の人権規制法案の国会通過を許したが——俗に海猫体制という——この『少子国難法』の国会への上程は、少子化防止という大義名分を笠に着た、海猫体制の総仕上げのひとつと指摘されていた。

この法律の趣意は未婚女性および未婚産女性の実数抑制と多産美化意識の社会的啓蒙であると説明されたが、条文を一目すれば、女性の基本的人権や男女平等権の剥奪と停止が骨子であることは明白だった。

つまり『働く女性』を『家』に帰すために諸制度を勘案し、税制を優遇するという『緩い統制』に止まらず、従わぬ者、反対する者には、法的勾留を認めた『強い統制』まで用意されていたのである。そしてその権限が一般の警察にではなく、一括的に海猫に付与されるという事実こそ、重大かつ深刻な問題なのだった。

「これは海猫が我々に仕掛けた『LIC：Low-Intensity

Conflict＝低強度紛争』なのです」

アメリカと我が国を行き来して活躍する三輪田恵はそう分析した。

「皆さん、この法案が執行されれば、ある日、あなたのところに赤紙が届くことになる」

反海猫派の重鎮である宇根燿子弁護士も糾弾した。

「未婚女性および未婚産女性へ出頭命令が来る。教助所と呼ばれる収容施設に最大三ヶ月間、入所しなければならない。その間、公休でもなく休職扱いにもならない。つまり事務的には無断欠勤となってしまう。そんな従業員を企業が置いときますか。すぐに解雇でしょう。結果的に女性は社会から葬られ家に戻らざるをえないというカラクリです」

宇根は今年還暦のはずだが恰幅のいいプロポーションはちっとも老けていない。

「教助所とは何なのか。それはまさに強制収容所といっても言い過ぎではない。施設管理者が全権を握り、収容者たる女性達を二十四時間に渡って監視監督する牢獄なのです。女性達に為されるのはレクチャーではなくブレインウォッシャー、すなわち洗脳です。未婚と未婚産をまるで犯罪のように扱い、亡国の根源であるかのような偏った価値観を押しつける、抑圧的なカリキュラムを必修とするのです」

まだ三十代の三輪田ももう一度マイクを握った。

「この施設を運営するのは誰なのか、それは海猫です。秘密警察がこんなことを担当するのは世界でも類例のない珍事と言っていいでしょう。少子化防止などはじつは隠れ蓑に過ぎないのであって、彼らは反海猫派弾圧の錦の御旗をまた一つ手に入れようとしているだけなのです。我々はその瀬戸際に、今、立っているのです」
教助所システムは何も勤め人だけを弾圧するものではない。

自分のような芸術家にだって壊滅的な停滞を強いるだろうと吉成はインタビューを続けた。

「三ヶ月間もアーティストティックなトレーニングの場から離れれば、その技術的損失は計り知れないものとなるでしょう。芸術家の魂に洗脳など暴力でしかないのは火を見るより明らかであり、まるでファシズムの悪夢ですね」

このような非道をもたらす赤紙を無視すればどうなるか・・・。

宇根弁護士はそれについても、もちろん言及していた。

「今度は本物の刑務所に収監されます。いや、刑務所ではない、もう少し軟らかい勾留棟だと彼らは詭弁を弄しますが、その得体の知れない施設は海猫の管轄する婦女収容所の敷地内に建設中なのです。職員に至っては今後十年間は収容所の所員が兼務できるとイケシャアシャアと但し書きまでついている。悪名高き収容所と何ら変わ

らないことは言うまでもないでしょう」
吉成聖が決起し、平和的な集会在騒然となるのも無理のない内実が『少子国難法』にはあるのだった。

憤りをただ怒りに変えるのではなく、音楽に昇華させる理性が彼女には確固として存在した。
澄んだ山間の空気にバイオリンの音色はよく鳴りよく響いた。

誰もが不平をいう口を閉じ、意識を吸い寄せられるかのように、その優雅な調べに聴き入った。

荒涼とした『冬』のリズムは、いつしか流れるように『春』のトーンへ変化していった。

小川を塞ぎ止めていた厚氷は暖かい日差しに融けて割れ、欠片が水流に落ちて消えていく。

途絶えていた小鳥のさえずりが森の向こうからゆっくりと回復してくる。

言葉や演説だけでは伝えきれない生の歓び、自由の美しさ、誇りを持って顔を上げることの大切さを、吉成の演奏は雄弁に語っているのだった。

これは伝説になるだろう——パブロ・カザルスの国連コンサートのように——誰もがそう思った。

今日の勝利が彼女のキャリアをいっそう輝かせるのは間違いなかった。

しかし・・・・・・・・

涙すら浮かべるの聴衆の目は美しきバイオリニストのステージから、やがて背後にある東の空をちよくちよく振り返り始めた。

感動的な演奏に酔い痴れていた彼らの耳に不安な雑音が侵入してきたからだ。

東の方角からそれはどんどんと近づいてくる。

夏の青空に落ちた墨汁の一点のようだった染みはすぐに双眼鏡を覗かなくともわかる明瞭な大きさになった。

真っ黒な大型ヘリが爆音を轟かせてこの会場へ直進してきているのだ。

異常なほどの低空飛行である。

高圧電線に引っかかりそうな錯覚すら生じさせる高度であった。

それが何らかの不可抗力によるトラブルでないことは安定的なコース取りからして疑いようがなかった。

あの軍用のように思われる大型ヘリは意思を持ってこちらへ向かっている——参加者達全員がそう確信した時、バイオリンの自然な調べは単調で攻撃的なエンジン音に掻き消されていた。

まもなく大型ヘリは会场上空に到着し、ホバーリングを開始した。

二基のプロペラが巻き起こす強烈な風が土埃を舞いあ

げ、聴衆の腰を浮かせるほど圧倒する。

舞台の袖から慌ててステージ上に走ってきた主催者のメンバーが口々に「海猫よ！海猫よ！」と叫んだが、そんな声は誰の耳にも届かなかった。

ただ一人、吉成だけが冷静にステージの中央に立っていた。

弾くことを中断したバイオリンと弓を両手に握り、まるでヘリコプターの巨体にたった一人で対峙するように遮光ガラスの嵌った暗黒の操縦席を睨みつけている。

毛先が飛ぶほど黒髪がたなびいている。

スタッフの一人が彼女の手をとって退避させようとしたが、美貌のバイオリニストは頑としてその場を離れなかった。

そればかりか、彼女は颯爽と両腕を繰って演奏を再開するではないか。

誰の耳にも届かない——おそらく自分の耳にも聴こえはしない——パフォーマンスだけの演奏はしかし、じっとこちらを観察しているはずの海猫どもには確実に『聴こえている』だろう。

イーゴリ・ストラビンスキーの『春の祭典』——

不協和音をクラスターにした変拍子の強烈なリズムは、二基の回転翼のもたらす轟音と波動を跳ね返そうとす

る。

集会に恐慌をもたらしたヘリは上昇し始めた。

思わせた通りに旋回を一度し、ようやく西の方角へ飛行していく。

素晴らしいスピードは南アルプスの緑濃き峰のどこかを目指しているようだった。

次第に小さくなっていく機影を吉成はいつまでも見つめ続けていた。

002. 四連のダイカン・・・菅野彩

本被捕確人・菅野彩（スガノ・アヤ）の連行には大型ヘリがそのまま用いられた。

通常最寄りの空港から護送車へ乗り換えることが多いのに、今回は給油だけを済ませ千葉にある第三婦女収容所まで空路直行である。

まるで重大犯罪者の扱いだが、逃走や奪回を懸念しての配慮というより、隠密理に収監するための方途と思われた。

市民やマスコミに見せていい一件という判断はない。闇から闇へ、葬り去るべき案件であった。

房舎の屋上にヘリポートがあり、多くの局員が大型ヘリを待ち受けていた。

制服、私服、男女と様々である。

みな頭上の夜空を見上げている。

到着したのだ。

着陸がすみやかに完了すると、プロペラの回転が収まるのを待たずに、数名の制服局員が機体の中央にあるドアへ駆け寄り、内部の人員に手助けをして重厚なそれを開放していった。

簡単なステップが設置された。すぐさま二人の黒殻局員に挟まれる格好で、菅野彩が下ろされてきた。

無地のブラジャーとパンティだけを身に着けた、夜目にも滲む白裸の姿がよるめいている。後手錠を掛けられているようである。

無機質な局員達の制服と対照的な若々しい柔肌の露出はヘリコプター内部でどのような扱いが彼女に為されたか想像させるに不足なかった。

そして地上局員へと受け渡された美人女子大生の顔がクローズアップされるや、やれやれという雰囲気居並ぶ局員達の間を流れた。

例の『断声器』が菅野の両頬に挟りこんでいたのである。

「うううう・・・」

ライトに照らしだされたその顔は苦しげに紅潮してお

り、呻き声のみを漏らせるだけのようだった。
口腔へ左右から押しこまれた頬肉は、唇を突きださせ、
鼻を盛りあげ、目を半眼に圧迫していた。オタマを挟み
つけるバネの力が調整を失敗したかのように——鬼の如
く——被捕確人の顔面を破壊しているのだった。

「さすがはK大の『隠れミス・キャンパス』 別嬪さん
じゃないの」

女性局員の一人が大声で言った。

二三人の笑いを誘ったが、誰もそれ以上の反応を示さな
かった。婦女教育課がちょっかいを出すくらいだから器
量良しなのは言わずもがなであるが、この娘の存在の重
大性からして戯れ言にかまける空気ではないのだろう。

「運上君、身の程を知らせてやりなさい」

落ち着いた声で指示を出したのはここにいる局員の中で
最も大柄で最も威圧感のある制服姿の男であった。

彼が最上位の役職にあるのは瞭然としていた。

野辺地大洋——海猫の局長である。

野辺地の言葉に逡巡なく従う運上もこの収容所の管理職
だった。プロレスラーのような体格を制服で包み、部下
の男性局員を次々に動かしていく。

菅野はいったん手錠を解かれ、ニキビ面をした若手局員
に背後から羽交い締めにもされた。

細い手足でもがこうとしても、鎮圧術に長けた男の拘束
を振りほどくことは不可能だった。

まず断声器が取り外された。

その瞬間、詰めていた呼吸が逆流したように、女子大生は大きく肩を喘がせた。締めつけられていた顔の肉が広がり、一気に血の気が戻ってくる。肩まである黒髪が痛々しく痕のついた頬にかかってきた。

何か叫ぼうとした菅野だったが、運上は事務的な手つきで、若々しい胸からブラジャーを脱衣させていく。若手局員との無駄のない協力により、菅野の身体は裏にされ表にされ、あっという間に白磁の胸元が晒された。

「山小屋ではあまり風呂にも入れなかったんだろ。少し臭うわ」

からかいながら、片方の乳房をわしづかむ運上。

「・・・何を・・・」

声帯はまだ回復していないようだ。

「デカイけど、けっこうシコってるじゃないか」

細眉の吊りあがった菅野の表情を嗤いつつ、運上は部下からニップルバンドを受けとった。

「ちがう、Mじゃない」

慌てて大きめのバンドに取り替えられて渡される。

「・・・触らないで・・・」

「乳輸出しっ放しじゃ収容所の神聖な風紀が乱れるんだよ。露出狂のお前には辛かろうがねえ」

「馬鹿な・・・」

しかし菅野はすぐに歯をキリキリと噛み締めるしかなか

った。

運上がふくよかな乳房を搾り、薄桃色の乳頭をよりあらわにしたからだ。

そこへ横一線に肌色のバンドを貼付ける。乳首を押しこめながら、乳輪のほとんどをその下に隠した。

「丸の上と下は出ちゃったけど、こんな大判に産んだ親を恨みなさいね」

運上の手はもう片方の乳房にも同様の侮辱を施していく。

細身の身体に豊かすぎる紡錘形が双つとも『一』に封印されたように見える。

「お前のような娘は、臍まで小生意気じゃないか」
屈辱に大きく上下する双乳の下へ、すべての局員達の視線が集まっていった。

さらに燃えるような紅潮が菅野の頬を焙った。

「体毛は——」

他の黒殻制服は全員機体へ戻ったはずなのに、その一名だけは菅野の傍らでファイルを探っていた。ゴーグルもヘルメットの上部へオープンさせている。

「——濃厚太黒です。肛門の周囲にまで密生してます」
ファイルを読みあげるその男の顔を見て、菅野はアッと叫んだ。

「あなたはあの時の！」

自分を装甲車の中に連れこんで、ストリップサーチとい

う陵辱行為を働いた張本人ではないか。

婦女教育課の吉崎だ。

さらに彼は伝法ゆかり検事に対する闇討ち事件の首謀者でもあった。そのさい海猫の職を辞したはずだったが、もう復帰を遂げたようである。

「ようやく思いだしたか。腐れ縁だからな。お前の死に水はやはりこの俺様にとってやらんと体裁がつかんだろう」

「——っ——」

死に水？ 吉崎の言葉に菅野は言葉を飲みこむ。海猫は自分を密殺するつもりなのか。そう疑われる変死体事件は多くあるし、海猫が自分をどう思っているかを考えれば、容易に想像がつく話ではあったが、本物の局員の口から言及が出たとなれば胃が縮み上がる気分である。

「吉崎君——」野辺地大洋がニヤつきながらたしなめた。「——滅多なことを口にしてはいかんよ。被捕確人にはこれから厳正な詮議が為されるんだから。その後、どういった判断が下されるか、軽々に憶測してはならんのだよ、我々の立場ではな」

吉崎は恐縮し、巨躯を小さくして頭を掻く。私淑する大局長に諭されれば一言もない体だ。

「とにかくさっさと収容者番号をケツに符らなきや、なーんにも始まらないんだから」と運上。

大人の丸みを見せる女子大生の腰部からパンティを剥き

下げ、足首まで落としてしまった。

菅野は悲鳴をこらえたが、目が充血してきている。

「オウオウ、たしかに毛深いな。腹毛までありそうじゃないの」

「うーん、久しぶりに見ましたけど、ずっと茂ってきているようで」

「山の空気を吸うと女も雪男化するのもかもな。保温のためにさ」

そうした与太話を並べながら運上は段ボールの厚紙でつくった前張りを菅野の股間にあてがっていく。

「お前の師匠の伝法よりひと回り小さくて済むけど。それでもモッコリ三角山みたいになって貼りにくいわ」強引に媚肉を押し潰して厚紙を固定すると、その縁に医療用のテープをベタベタと貼っていった。台風に備えて窓を目張りするようにだ。

しかし鼠蹊部の陰毛は大量にはみ出たままである。

「いずれここは髭剃りシェーバーで刈りあげちまえばいいさ。師匠のようにな」

肩をすくめて戯ける運上は背後の局員を呼び寄せた。

「ダイカン、持ってきて」

彼はすぐにガラガラと台車を押してきた。

四つのキャスターが底部について自由自在に方向を変えられる。

台上には校庭や小公園にあるような黒い鉄棒が備え付け

られていた。

高さ約150センチ、幅約100センチだろうか。

ところどころに赤茶けた錆がみえている。

左右の縦棒（ポスト）の、上から三分の二付近に皮手錠のようなものが固定されていた。腕帯の形態である。

横棒（バー）の中央には数十センチの長さでタオルケットがグルグル巻きにされロープで両端を括られていた。

ベージュ色だったはずだが湿っぽく汚れている。

バーの隅には白いポリ袋がフックで引っ掛けられてぶら下がっており、丸めたコピー用紙などが詰めこまれていた。

菅野には初めて見る不気味な姿とってよかった。

「喜びなさい。お前はVIP待遇だからね。自分で歩かなくていいんだ。これに乗って移動するんだよ。ダイカンって呼ばれてんだ」

運上はそういいながらもう一人の局員から受けとった幅広のベルトを菅野のウエストに巻いていく。

ボクシングのチャンピオンベルトのようにずっしりと重いそれは柔らかな腹部に食いこんで女子大生を呻かせた。

そのベルトには幾つものアタッチメントが付いていて様々な『何か』を接続できるようになっていると思われた。

菅野の両腕が背後へ引っ張られる。

肩が反って窄まるほど一つに束ねられると、まず並んだ両肘の上腕側に皮ベルトが巻かれた。

「痛いっ・・・」と思わず美貌を引き攣らせる。

両手首にも同様に一本の皮ベルトが巻きつけられた。血管が締まるくらいのきつさである。

二本の腕がギリギリまでひとつにされたわけだ。

肩甲骨が拉ぎあって音さえ伝わる感じである。

菅野の頬や額に脂汗が光りだす。

そこまで完了すると、数名の局員が四方から彼女に取りつき、腕の激痛にも、陰部が露出する羞恥にもめげずに暴れる身体を難なく抱えあげた。

そして台車へ運ぶと、鉄棒のバーを腋の下に挟むように引っかけるのである。冷たいバーは柔肌に抉りこみ、上腕骨と肩甲骨まで達するような硬さである。

そのまま肘が内側へ折り曲げられ、両手首の皮手錠にあるカラビナ状の留め金を、腹部のベルトのアタッチメントに接続してしまう。

「アアアッ—————」

横から覗けば両腕は『く』の字を強いられた状態だ。ここでバーに巻きつけられたタオルケットの意味がわかる。あれは緩衝剤なのだ。無ければすぐにでも皮膚が破けてしまうだろう。ただし自分の体重がかかるので苦痛が軽減されることはないだろうが。

両脚にも局員達の手がかかった。

固定された腕や肩が邪魔をして抵抗は弱く単発に終わる。

本当に上半身はびくとも動かない感じである。

膝がわしづかまれ、サイドへ思い切り開脚されてしまう。大腿部などは床やバーと平行になった。

そこから膝下の足が直角に折れ曲がり、これはポストと平行である。

その臍の最上部分にポストにあった皮手錠が嚴重にベルト締めされるのだ。

もちろん逆側の足も同様の戒めを施される。

「ヒッ———」

物凄い格好が出来上がった。

門型の鉄棒に手足を括りつけられた二十代の全裸体。

180度を越すような開脚をされた二肢は鼠蹊部からの筋腱がこれでもかと浮き立っている。

腋の下と肘と手首に間断なく発生している激痛に、股関節と膝が加わって、さすがに勝気な菅野も悲鳴を放った。

痛みだけでなく、女の尊厳をズタズタにする胸を刺すような羞恥心が顔面から首筋へ、そして胸元まで緋色に染めあげるのだ。汗も臍の周りにまで搔いている。ニップルバンドと前張りがなんとも猥褻であった。

「あとで鏡に映してやるけどね。見た目、漢字の『内』に似てるんだ。だからこの台車のことを正式には『内架

運搬（ダイカウパン）車』。それがいつのまにか短縮されて『ダイカン』ね」

運上は真っ赤になって振りたくられる菅野の顔を、顎を搾るようにつかんで正面にじっとさせて言った。

「ほどいてっ、ほどきなさいっ」

そんな切羽詰まった叫びを無視して、次に彼女に迫ったのは二人の女性局員である。

二人は菅野の美しい頭髪を二分割して受け持ち、器用な手つきで三つ編みにしていくのだった。

「娘は娘らしくしないとねえ。未熟な学生には分相応のヘアスタイルが決まりなんだよ」

運上の言葉だが、それは菅野も噂に聞いていた。海猫収容所の女性政治犯はすべて——年齢を問わず——お下げ髪にされてしまうのだ。どれだけ女性を馬鹿にしているのかと酷く不快に思ったものだが、ついに自分の身で噂を体験することになるとは頭がクラクラするほどのショックである。

「・・・あなた達に・・・そんな権利なんてない・・・」

眉間に皺を寄せた憎しみの表情で女子大生はやっとそれだけ口にするも、すぐに苦痛の渦に巻きこまれて頬を歪めてしまう。頭髪を編みながら女性局員が菅野の肉の張ったヒップを平手打ちにしたからである。

数分を要して三つ編みが完成した。

「そんなに仏頂面するんじゃない。ここじゃ三十路でも四十路でも、基本、この頭なんだから。一緒じゃないとかえって気まずくなるさ」

運上は菅野の二本のお下げを遊びながら嗤う。

「じゃ吉崎、仕上げてやってくれ」と野辺地。

吉崎はペコペコとお辞儀をしながらポリ袋からカルテを取り出した。

「へへへ、お前の収容者番号は404だとさ」

と確認し、手に黒のマジックペンを握ってダイカンの背後へ廻る。

「へへへ、これは俺が是が非でも書いてやらなきゃな」真っ白な尻たぶに直接、数字を書きこむのが仕来りである。引導を渡す——まさにそんな心理的効果が信じてられている。

吉崎は彼女の臀部の前に屈みこみ、片手で押して『空欄』の位置を整えた。

必然的に局部が大腿部の前へ迫り出した。本当に180度を超えたのだ。

顎を突きだして仰け反る菅野。三つ編みが二の腕に降りかかった。

肌にマジックペンの先が触れ、肉に沈みながら蠢いていくおぞましさに、小粒の歯を剥きだしにして苦悶する。

「なかなか仕込みがいのある青いケツじゃないか」

野辺地大洋が冷然と言った。

「伝法の汚いケツには403とあったはずだ。師弟コンビの誕生だな」

昨日の今日の伝法ゆかりの屈服がどれほど快心だったのか、この野辺地の表情を見ればわかる。小物とはいえ、菅野彩もこうして籠中の鳥とすることが出来た。これからは連中の囀りを楽しむばかりの毎日となる。薄ら笑いが滲んでくるのも当然だった。

「ようやくイッパシの収容者になったじゃない。似合ってるわよ。ジーンズにTシャツなんかよりずっと学生らしいわ。これから一心不乱に再教育カリキュラムを受けなきゃならないんだから、虚飾は捨てなきゃダメ。わかるでしょ」

常軌を逸した台詞をいう運上に、菅野は気丈にも何事か言い返そうとしたが、まだ背後に残っていた吉崎に双臀を押されて理性の言葉は金切り声の苦鳴に変わってしまった。胴体が前後に揺れるだけで全身の痛みが一気に増すのだ。

口はとりあえず閉ざすしかない。菅野は血を飲む思いで自制しようと決意する。反抗するにはこの『ダイカン』の拷問は酷すぎた。じっとぶら下がっている——そういう表現が当たっているのかもわからないのだが——だけでも耐えがたいのに揺らされたら反射的に絶叫が出てしまうのである。

しかしそれは彼女にとって最初の敗北であるのだから、

こみあげてくる峻烈な感情が収まらず、ハアハアと大きく喘ぎながら悔し涙を一筋流したのもやむを得ない。

(海猫に屈服させられるなんて・・・)

秘密警察の強大さは頭ではわかっているけど、どこか現実味の薄いものでもあった。捕まったらああしてやろうこうしてやろうというシミュレーションもあった。だがそれは『ダイカン』の残虐性の前ではすべて児戯に等しかったのである。挨拶代わりに殴られたパンチにすっかり怯んでいる自分に、菅野は動揺するしかなかった。

伝法検事が謀略に絡めとられた今、頼りはその自分しかないのに、だ。

「じゃ、クラスメイトに会わせてやろうじゃないか。みんなお待ちかねだよ」

運上の合図とともに、屋上に集まっていた一団が移動を開始する。

菅野の女体を埋めこんだダイカンもガラガラと押されだした。

キャストにサスペンションなど付いていないので、屋上のちょっとした凸凹もきつい振動となって菅野の腋窩や肘膝を痛めつけてくる。

本当に身体において自由になるのは首から上と足首から下のみだった。

だが顔はガックリと項垂れるままか、ときおり痛みを振り払うように前後左右に激しく折り曲げるか、しか出来

ない。

足も、そうすることが少しでも体重を分散させるかもしれないと、ジタバタとフットレストを探るように動かし、爪先でポストを探り当て、足指を真っ赤にして挟み掴もうとする滑稽な蟹ダンスをするのが精一杯。脂汗はその足裏をも光らせている。

003. 騷りものにされる女子大生政治囚・・・高橋ミカ、田野倉マリ、山上紗英

ダイカンを先頭にした一団は建物の内部へ入った。廊下のリノリウムの床は振動をほとんどなくしたけれど、天井の蛍光灯からの照明は昼間のように明るく、酸鼻な菅野の姿を一部始終、露見させた。角を何度も曲がり、エレベーターにも乗るうち、収容所の所員とすれ違うことも多かった。そのつどダイカンは停車し、野辺地や運上による被捕確人の『紹介』が為された。菅野彩捕確や収容所連行のニュースはこの関係者であれば皆が知っている情報であるから、今更説明など不用であるはずで、野辺地達のこの『丁寧』なレクチャーはもちろん『市中引き回しの晒しもの』をするための行動だった。陰湿なその仕打ちに菅野は顔をまともに上げられず、俯

いたままにするしかない。

すると視界には己の胸に膨らんだ双乳がどうしても入ってくる。紅かったはずの乳頭に貼付けられたニップルバンドも……。それは垂れさがる二本の三つ編みにぶつかってもいた。惨めで、打ちのめされる光景だ。さらに乳房の深い谷間の底にチラチラ垣間見える陰毛と前張りの恥丘も女子大生の精神を苛んでくる。尻たぶにはまだ書き殴られた収容者番号の感触が明確に残っていた。まるで焼き印のようだ。

煽り立てられた屈辱で紅潮した顔面を、ファシスト達は頻繁に仰け反らせた。顎を掴み、三つ編みを引っ張り、あるいは尻を蹴り飛ばして強いるのである。

乗り換えたレベーターは長い時間降下し続けるのだった。

一団も数名に減っている。

セキュリティが厳しくなってきたのだろう。

地下三階で止まり、扉が開く。

それまでとは明らかにちがう空気が充満していた。

「・・・っ・・・」

女性の体臭が混在しているのだ。汗や尿、そしてそれらとは異なる体液の匂いも指摘できる。

菅野は愕然として顔を上げ、フロアの様子をうかがった。

壁も天井も通路もすべて灰色のコンクリートの地肌が剥

きだした。

通路の両側には視察窓付きの重厚な鋼鉄扉が並んでいる。

静寂が圧倒的な威圧感を持っていた。

「『モグラ房』とってねえ。お前のような反抗的な収容者を入れておく監房なのさ」

正確には政治犯の女闘士達がターゲットなのだろう。

これも未確認情報として菅野の知識に刷り込まれていた。伝法検事が最も関心を持っていた秘密のエリアでもある。秘密警察の核心部分なのだ。

ひょっとすると伝法もこの区画のどこかの部屋に幽閉されているのかもしれない。

通路の十字路で向こうからやってきた一団と遭遇した。

三人の女監がダイカンを押してきたのだ。

鉄棒には菅野と酷似する無慈悲に拘束された若い裸女が疲れ果てたように首を折っていてこちらに頭頂部を晒していた。

「おや奇遇だね。そいつも歓迎会に行くところだろ？」
運上の質問に女監全員が直立不動になって返答する。

「ハイ！ 178号を送房中でありませう。出掛けにやや手こずらしまして、すでに送房を完了していなければならない時間ではありますが、こうして急いでいるところなのです」

「え？ また反抗してるのかこいつ——」

運上は驚いた言葉とは裏腹に口元をニヤつかせながらそちらのダイカンにブーツの足をかける。

「モグラ房の先輩として新入りに手本を見せてやれっていう歓迎会なのに、よくもまあ懲りもせずブー垂れてくれますなあ、アーン？」

菅野よりさらに長い頭髪はやはり三つ編みにされており、運上はそれを掴んで顔を起こしあげた。

彫りの深いハーフのような目鼻立ちだったが、隈もできており、顔色も蒼白い。寔れ荒んでいるといった印象だ。

しかし運上を睨みあげる眼光は強く、きついものがある。

「なんだその目は。すっかり落とされたくせに、どのツラ下げてって奴だよな、高橋！」

運上の平手打ちが高橋と呼ばれた女性収容者の頬を弾いた。

「ほほう、痩せポチじゃないか——」野辺地大洋が運上の横に来る。「——しばらく見ないうちに女らしい身体つきになったな。初めてここに来た時は鉛筆みたいで、まさに『痩せポチ』だったが。基本的には正常化の道を上っているようで嬉しく思うぞ」

海猫の局長が顔を見せたので高橋はアッと表情を凍りつかせた。何ととってもすべての政治犯の処遇はこの男の一存で決まるのだ。これまでの自分への拷問も、今日こ

の下劣なダイカンに乗せられたのも、野辺地大洋の指示
と言っていいのである。

「胸だって少し膨らんだよな」

野辺地は菅野の巨乳に比べればずいぶん薄い彼女の胸を
まさぐった。そこにもちゃんとニップルバンドが貼られ
ている。

「どうしようもない貧乳だったはずだが」

「カルテによれば収容時の検査では胸囲78でしたが、
現状は79.8になってます」

吉崎が高橋の鉄棒にかかっていたポリ袋から書類を抜き
取って読みあげた。

数値のスケールの小ささに局員達から失笑が漏れた。

「もう少しで大台に乗るじゃないか。諦めずに乳房（ニ
ュウボウ）マッサージを継続しろよ。お前には是が非で
も更生してもらわなきゃな」

野辺地の手が恥辱に息づく胸からグリグリ音を立ててい
るような双臀へと移った。

「腰囲は83から83.6です」とすかさず吉崎。

「どこもかしこも鈍感な肉ってわけだ。脳ばかりに血を
巡らすから女体成熟が疎かになってしまう。女の脳は思
考するための演算装置ではないのだぞ。女体を女体たらし
める本能を健やかに発揮するためのカマドなのだ。女
の脳に認められた論理性はせいぜいオギノ式を計算する
ことくらいなのに、小難しい思想を飲みこもうとするか

ら消化不良を起こして全身に無理がかかる。あげく健全な第二次性徴期を停滞させ、このザマだ」

撫で回していた尻肉を軽打すると鈍い音が響いた。痛めつけられている二の腕と掌が薄紫色に鬱血している。どこの素肌からも苦汁が匂い立っている。

「そろそろホルモン治療が必要かと」

高橋にも菅野にも聞こえるような声で、運上が野辺地に囁いた。

首を傾げる海猫局長。

「あれはあくまでアレだからな」

これまた聞こえよがしに思わせぶりの返事をする。反抗者への脅迫ということだ。不気味な処遇を匂わせて恐怖による統治を構築しようとする。菅野はそう値踏みをしたが、あんがい『先輩』高橋のほうが焦燥の表情になっていた。ここで長く拘禁生活を続ければ、拷問者達の言葉がどれほどの重みを持つか、身に染みているのかもしれない。

(ホルモン治療って・・・まさかそんなこと・・・)

いくら何でも人体実験のような真似まで海猫が行っているとは、菅野は噂にも聞いていなかった。

それでも野辺地大洋の今の時代錯誤の言動は『少子国難法』の背後にある魂胆と合致する男尊女卑思想であって、その暴走の辿り着く先に待っているのが何なのか、想像を絶するといえはその通りではあった。

「・・・赦されないわ、あんな・・・」
絞りだすように高橋ミカが盾をつくると、それを叱る運上
が女囚の鼠蹊部を平手打ちした。

「イッ！」

「局長に汚い言葉遣いをしたらどうなるか、わかってん
だろうね瘦せポチ！」

「まあ運上君、それは向こうへ行ってから話を付けると
して、そろそろ動きだそうじゃないか」
合流した人員はひとつのグループとなって通路を進みだ
した。

高橋のダイカンに続いて菅野のダイカンが押されていく
わけだが、菅野の目にはどうしても高橋の臀部が飛びこ
んできてしまう。

自分のヒップもあれとそっくりになっているのだと思う
と胸が熱くなった。

一直線に強制開脚された大腿部の筋腱がつねにプルプル
している。その太腿の体勢は双臀の谷間を押し潰すよう
なので、尻の丸みは凹んでいる。何とも痛々しい印象
だ。そこに収容者番号なるものが黒々と書き殴られてい
る。ゾツとする非人間性ではないか。

『178』と符牒された尻の持ち主は決死的な勇気でも
って後続の菅野へ声をかけてきた。

「・・・菅野彩さんね・・・あなたの名は知っている
わ・・・私は高橋ミカ・・・」

たしかにこれだけ海猫にレジスタンスを働いたのだ。情報封鎖されている収容者であっても耳にしたことがあるのだろう。この数分間のやりとりの中で勘のいい高橋はすべてを察したのである。

すぐさま女監の一人が金切り声を発した。

「オラ、収容者間の私語は厳禁だろうが！」

携帯していた金属警棒で高橋の足の裏を突いた。

彼女は喘ぎながらもそれでも口を閉ざさなかった。

「・・・諦めてはダメよ。必ず正義が勝つからだから・・・」

「ええ、わかってますっ。皆で頑張りましょうっ」

菅野は手錠で括られ、腰のベルトに接続されている高橋の手がVサインの形を作っているのを発見し、勇躍、返事をするのだ。

黙れ黙れと警棒を振り回す女監に肩やふくらはぎを殴られて、このシュプレヒコールは鎮圧されたが、てっきりたった一人での闘いになると覚悟していた菅野にとって蜘蛛の糸が降ってきたような光明といえた。

「ダイカンに架かってるザマで、正義もクソもねえだろうがよ。痩せポチ！」

さすがに運上は落ち着いており、せせら笑いながら高橋のお下げ頭を小突いている。

「そうそう、痩せポチというのはね——」と収容所女監長は菅野のほうを見て言った。「——ここでは女監と収

容者の交友を深めるために、お互い、ニックネームで呼ぶことにしているのさ。この178号につけられたのが『痩せポチ』ってわけ。やっぱり身体付きから来るのが多いかな。色黒なら便所コオロギとか足が太けりゃ助平大根とか、お前のも何か考えなくちゃねえ」

ジロジロ眺めましてくる運上の視線に菅野は怒りを通り越して呆れるしかない。『交友を深める』も何もこれはただの蔑称ではないか。どこまでも卑劣な構造になっているようである。海猫は！

会議室のような部屋に到着した。

すでに先客が『二人』いた。

いや『二台』といったほうがいいだろう。

菅野らを迎えるように、正面の壁を背にした二台のダイカンが並んでいる。女監二人に加え、男の制服監守も三人いた。

「やあ遅れてすまなかったな。これで頭数は揃ったというわけか」

野辺地局長が現れたものだから談笑していたらしい局員は一斉に気をつけをする。

高橋のダイカンが先着二台の列に並べられた。

菅野だけがその列と向き合う形で置かれた。局員は椅子に腰掛けたりもし、周りを取り囲む。

「・・・」

菅野は改めて息を飲むしかない。

高橋の隣の二人も自分と瓜二つの拘束を為されている。年齢も自分と同じくらいだろう。

左端の女性は大学生と思われた。身体付きは高橋に似た細身である。力なく持ちあげた顔にも非道の獄房生活を物語る消耗と疲弊が散見できた。元々はやはり美貌の部類であったと想像される。しもぶくれで切れ上がった目を持っていた。彼女はその目で菅野を見つめたが、居たたまれなくなつたように、すぐに顔を伏せてしまった。しかしどうしても視線が引きつけられるのは中央の女性だった。おそらく大学生の年齢にも至っていないのではないか。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

004. イキゴロシにかけられるインテリ大学生達

六つの乳首に銀色のクランプが取りつけられた。洗濯バサミを強化した責め具だ。

「乳首の痛みなんかすぐに麻痺しちゃうから、痛くも痒くもないのよ。非常に気持ちの良い状態ってことよ」
運上の説明にはまったく同意できなかった。たしかに絶

叫まではなかったものの三人の美貌は収まりがつかぬほど歪んでいる。瞼にすら脂汗が吹き出していた。

「『大先生』挿入！」

運上の号令に回診車から黒塗りの巨大な張り型が取りあげられた。明らかに男性生殖器を模しているわけだが、ヌルヌルした表面にみえる大粒小粒の瘤など、女性なら唾棄するに決まっている凄惨な造形である。

『大先生』というのは商品名なのか、海猫特有の女性を愚弄するための『ニックネーム』なのか。とにかくその使われ方は菅野にもわかることだ。

その後部にコードが接続されると内蔵されたモーターが唸りを上げた。

「断固拒否！ やめてっ。いやっ——」

「なぜ嫌がるんだ、瘦せポチ。また諭されるからか？ お前はいつも『大先生』に論破されちゃうものなあ、最後には」

『大先生』の表面は両生類の皮膚のように粘性の液に覆われているので、開帳された女陰への挿入は容易な作業であった。長さ十数センチのそれは流線型の亀頭から体内へ沈められていった。

ストラップを腹ベルトの背中側に結びつければ、人造巨根が滑落することはない。膣内に留まったまま、淫猥な蠢きを繰り返り広げ続けるのである。

下腹部を圧倒する膨満感に二人のお下げ髪的女子大生と

一人の丁髷の女コマンドーは呼吸を乱していく。

「肛門スイッチ装填！」

駄目押しされる凌辱。

「今日は歓迎会なんだから、特典も用意しておいたわよ」

肛門へ挿しこまれたのは旧式の血圧計に付属していたようなゴムポンプだった。感圧センサー内蔵である。周囲から圧力をかければ空気ならぬ電気信号が発信されるようになっている。どこへ？ むろん新たに接続されたコードによってすぐ上部の『大先生』へだ。

「スイッチなんだよ、これは。肛門を閉めれば『大先生』のモーターが切れる。開けばモーターが入る。休む権利を自分で行使できるんだ。温情だねえ。感謝の涙が出るんじゃないのかい」

部屋中が笑い声につつまれた。

スイッチを入れているかどうかは、モーター音が鳴っているかどうかで一目瞭然となる。今は三人とも腹筋まで動員してそのスイッチを締め続けており、腹の中の『大先生』は鎮まっている。が、肛門の力など弱いものだ。とくにダイカンに緊縛されている逼迫した状況でもある。一分もしないうちに限界が来るだろう。そう、クリトリスへの静電気ショックもある。

まさに生き地獄が開始されたのだ。

すぐに、匂いだけでなく大量の汗玉が三個の肉体を光ら

せた。

間歇的に轟く悲鳴の合間は、呻きとも喘ぎともつかない苦悩の女声が埋めた。

女監達は腕まくりした素手で、雁字搦めの女囚達の裸体を、その丸みを強調するようにマッサージしていった。

手つきは優しげだが、陰湿に同性の恥を突いている。

最初に音を上げたのはやはり紗英だった。

青い乳肉をネチネチと掴みとられ、皮下に滲んでいる血管も黙殺され、硬い乳首をゴシゴシと扱き立てられた。

太腿の強ばりが流れこんで詰まった感のある臀球を、刺戟するように何度も平手打ちされる。

すでに紗英の肛門の筋肉は締まりを喪っていた。腔腔の中で『大先生』は暴れ放題となっている。淫らに鈍麻した感受性はクリトリスに放電を通されても苦痛と認めず、ただ鮮烈な愛撫としか呑みこめないようだった。太棹の円周にみっちりと附着した赤身の贅肉から、とろろ芋を擦ったようなバルトリン腺液がどうしようもなく滴り落ちていた。おそらく肛門の括約筋に握力が甦ったとしても、彼女はそれを行使する理性などもうないだろう。残虐な改造を強いられた女体が恒常的にもたらず積もりに積もった性欲に、卑劣な淫具の起こす油が注ぎこまれ、肉体ばかりでなく脳の髄まで獣の快樂に蝕まれてしまったのである。

「・・・アア・・・ううっ・・・」

乳房を餅のように捏ねあげられ、唇や舌ペロを刺身のよう
に摘まれ、徹底して捌りものにされる。

菅野の心はおぞましさと憤怒で眩暈を覚えるほど熱く煮
えたぎった。

しかし現実は酷薄である。紗英の漏らす鼻息は誰が聞いて
も何を意味しているか明白なほど切迫してきていた。

喘ぎが小刻みだ。

眉間に皺が溜まる。

ふと、このままだと衆人環視の中で恥を晒してしまうと
いう焦燥が逆流してきたように、綴じ合わさっていた腫
れぼったい瞼がカッと見開き、濡れ澱んだ瞳と充血に濁
った白目とをドロリと動かし、まわりの女監の顔を探し
た。

「なんだい？ イキたいのかい？」

覗きこむ女監に紗英は汗が飛び散るほど横ざまへ首を振
りたくる。

「このへんでガス抜いとかなないと、発狂するだろ。また
医療長に電気ショック療法かけられるよ。色ボケした
頭、スッキリさせるにはオマxコ以外だと、アレが一番
だもんな。そうするかアーン！」

するとさっき以上の激烈な顔の振り方をして狼狽をあら
わにする紗英。

拷問として禁止されているどころか、まともな医療とも
認められていない頭部へのエレクトロニック・セラピー

もまた、この地底刑務所では復活しているようなのか。

「オラ、イク時はどうオトシマエつけるんだった？ お前もとうとう先輩だ。新米の後輩に教えてやんな。痩せポチやオカメにもいい手本になるぜ、さあさあ！」

頭髪ごと熱湯をかぶったような紗英の顔に、女監は自分の鼻面を密着せんばかりにして、血管が散った彼女の目に唾がかかるのも、鼓膜を破くほどの大声であるのも、まったく躊躇せずに追いこんでいく。

「気持ちいいんだろっ、素直になれ！ 虚飾を捨てる！」

「思想なんか忘れろ！ 女には豚に真珠だ！ 妊婦には百害あって一利なしだ！ 母親にはキ×ガイに刃物だ！」

今の紗英にその意味するところが伝わっているとは思えない。高橋や田野倉姉へのメッセージであり、菅野への教育でもあるはずだ。

「——アアアアッ————イッツッ————」

汗みどろの紗英の様子が急変していくのがわかる。甦らせていた嫌悪の表情は女監が荒々しく操った『大先生』によってマッチの頭の如く燃え尽きた。愛撫されるすべての肉から沸き昇ってくる愉悦の大波に覆われていくのをどうしようもない。

二十歳の菅野にとって生まれて初めて目撃する女性の痴態。自分の数少ない経験——セックスや自慰——からは

到底、想像しえない生々しさが眼前で展開していた。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

005. 『教助所システム』良心的忌避条項・・・吉成聖、宇根燿子、三輪田恵

天下分け目の政権選択総選挙によって、大勝利を収めたアンシャン・レジーム系連立与党——俗に海猫派——は選挙公約通り『改正少子国難法』を国会に提出、大差をもってこれを可決成立させた。

法案反対派も抵抗はしたが選挙惨敗の後遺症で動きは鈍く、一部修正を譲歩させるに止まった。

法律は2×××年某月某日公布され、同日より執行されることとなった。

アメリカ合衆国・ニューヨーク市郊外にある別荘地区は紅葉した街路樹に包まれた閑静な佇まいの中にあった。バイオリニスト吉成聖の自宅兼練習スタジオはその一画にあった。

今日はそこに二人の日本人の来客がいた。

東京から急ぎよ駆けつけてきた弁護士の宇根燿子とワシントンに活動の本拠を置くジャーナリスト、三輪田恵である。

庭に面した白亜のテラスリビングに二人は招き入れられていた。

緑の芝生とノルウェイメイプルの街路樹が陽射しを柔らかく和ませていた。

吉成の素肌はじつに清々しく輝いている。コンサートの時のように長い髪をポニーテールにはしていなかったが、化粧っ気のない顔は秋の光線に照らされて生き生きとして見えた。

白Tシャツには『FUCK UMINEKO』という大きなロゴが入っていた。洗いざらしのブルージーンズの足がゆったりと組まれ、膝の高さにある円テーブルから手に取った書類を丁寧にめくっている。

「本当に赤いとはね」首をすくめる吉成。「ジョークと思っていたけど、赤紙だなんて」

たしかに赤い用紙を使っているその書類の表紙にはこう印字されていた。

『教助所への招集決定に関するご連絡』

その書類をはるばる携えてきた宇根弁護士は吉成聖の日本における法定代理人である。

「海猫の嫌がらせよ。悪質な」

還暦を迎えた宇根のプロポーションはグレー・スーツの上からでもグラマラスとわかるが、美人弁護士ともてはやされた時期もある容貌はじゅうぶんに臍長けていた。

「一般の国内居住者には通常の白い用紙で送られてくるのに、海外居住者にはこの色の紙を使ってくる。とくに吉成さんのような・・・」

「私のような・・・札付きのレブル (rebel) ?」

「そうね。挑発の意味もあると思う。海外著名人には反海猫派が多く、国際世論を恐れて招集命令を先送りすると思っていたけれど、どうも逆のようだわ。つまり――」

各国の同情論が冷めていないこの時期であれば、居住先の市民権等も比較的容易に発行されるだろうから、海外有名人の多くは合法的に『少子国難法』体制の網をくぐり抜けるように身を処すだろうと読んでいるのではないか。エリートの特権を利用して国内組のほとんどが拒絶できない義務を回避するとしたら、その海外有名人の評判はガタ落ちだ。オピニオンリーダーとしての権威も失墜である。女性の権利に強い関心を持つ先進国の政府や市民を喚起して、反対運動を展開する彼らに手を焼いていた海猫としても国内をほぼ体制固めした今、早々に手を打ってきたということだ。

「なるほど。招集決定に従うのであれば手中に収めるこ

とが出来るのだから、これも海猫の意のままだ。進むも地獄、引くも地獄、ファシストも無い知恵、絞ってきたわね」

言葉は深刻な状況を捉えているが、どこか他人事のように屈託ない表情の吉成。毎日、身を削って芸術を追求している音楽家には見えない時がある。いや、こうした天然ボケの部分がないととても常軌を保てない世界に生きているということなのだろう——三輪田恵は友人の顔を見つめながらそう思った。彼女も宇根弁護士と同じく、吉成聖のサポーターであり、おもにアメリカ側での活動について助言や分析を行っていた。今日は白ジャケットに揃いのパンツ、インナーはタートルネックの赤ニットという出で立ちだ。ショートボブに縁取られた顔は十歳は若くみえる童顔タイプである。

「あなたの前にある選択肢は三つよ」

暖かく感じたのか三輪田はそういいながらジャケットを脱ぎ、椅子の背に掛けた。胸がニットのシャツに影をつくっている。

「一、招集に応じず、アメリカもしくはは長期滞在経験のあるオランダの市民権を得る。二、招集に応じ、教助所に入所、連続150日間のカリキュラムを全うする。三、招集に応じるが、良心的忌避条項を申請し、通算1000日のボランティア活動に従事する。この三つね」

「逃亡者となって延々逃げ続ける、ってのは？」とまた

吉成は冗談を口にする。

苦笑する三輪田。それでは浮気性の大衆の支持はすぐ立ち消えするだろうし、一応、犯罪者引き渡し条約等の縛りのある政府レベルではシェルターの役目を果してはくれないだろう。もちろんその程度は吉成にもわかっている理窟だ。

「この忌避条項というのが最後に改正案に盛りこまれた部分ってわけだ」

「そう——」宇根が頷く。「——この程度の譲歩を引きだすのが精一杯というところだったわ、あの選挙結果では」

良心的忌避権というのは、通常、徴兵制度に関して設けられた権利である。良心の自由、思想信条の自由、信教の自由などからの要請で戦争行為に加担しないという個人の意思を尊重するための制度だ。古くは南北戦争から存在し、現代では先進各国が採用しているシステムである。忌避して戦場へ行かない者はその代替として福祉や救急活動といった社会奉仕を数年間おこなうことになる。もっとも徴兵制そのものが衰退しているのでこの制度自体、取りあげられることは少なくなったが。

「教助所システムが兵役と一緒にという実態を世に知らしめたのは、功績と言えは功績なのだけど」

宇根の言葉に相槌を打つ吉成。

「私の友人の多くも、これには呆れていましたよ。だけ

ど海猫もよくこんな譲歩をしたものだわ。改正せずにそのまま強行突破しようと思えば出来たろうに」

「国際世論をこれで少しは緩和できると見こんだんでしよう。これを落としどころとして準備していた節がある」

「ほう——」悪戯っぽく笑う美人バイオリニスト。

「——忌避制度を多用されたとしても『少子国難法』体制は揺るがないという自信が連中にはある？」

「ええ、おそらくそういうことでしょう」

吉成はほっそりとした指で赤の書類を何回かめくり返し、読み落としがなかったか確認する。瞳は大きいが全体的には東洋系の丸顔であろうか。

【##### この章の残りは有料本編でお読みください。 #####

006. 忌避者に与えられたボランティア・・・吉成聖、坂上郁美、森沢瑠奈

約一ヶ月後、吉成聖はフィラデルフィアでのソリスト公演を終えたその足で、空路、日本へ、そして成田空港に降り立っていた。

今回の滞在は十日間。

いよいよ少子国難法との——つまるどころ海猫との——正面对決が始まるのだ。この期に及んでも、良心的忌避による代替の奉仕活動が、いったいどんな種類のものなのか、情報漏洩への懸念を盾に一切明かされていなかった。空港で特務庁の担当局員と落ち合い、そのままスケジュールに入れという通知である。急だったので、宇根燿子と三輪田恵には帰国する日にちをメールするのが精一杯だった。言うまでもなく二人にはそれぞれ激務がある。覚悟していた成り行きだが一人で闘うしかなかった。

十日分の着替えや身の回りの品を詰めたボストンバッグ二個——携帯品として許可されている上限——をカートに積み、さらにその上にバイオリンケース——宇根が当局に掛け合って何とか持ち込みを勝ち取った——を乗せてガラガラと押していく。

特務庁の局員はエントランス付近で待っていて、すぐに吉成を発見し、小走りで近づいてきた。

吉成もその男が自分を迎えに来た担当者であることを瞬時に理解した。

なぜなら彼は夜間の道路工事に付き合う警備員のような、派手な蛍光色のオレンジベストを黒背広の上から羽織っていたからだ。同じ素材の帽子もかぶっている。

人々でごった返す吹き抜けの広大なエントランスであっ

ても見逃すなどは有り得ない。そしてベストの胸や背には黒々と文字が書かれている。

『忌避者奉仕中』

国際空港利用者達はまず場違いな衣裳に注意を引きつけられ、すぐにこの文字にも目を奪われる。

帽子には特務庁のロゴも入っていた。一般の日本人であれば、男の隣でカートを押している女がどういう状況の人物であるか、すぐに理解するだろう。宇根弁護士の報告によると、『忌避者』には、例えば脱税者のように、国民の義務を狡猾にくぐり抜ける者というレッテルを張る風潮なのだ。エリートが特権を行使していると曲解する者も多い。今日の吉成聖はハワイ帰りのようなカーディガンを腰に巻いたTシャツ・ジーンズ姿だから、著名美人バイオリニスト本人と見破る人はおるか、注目する人さえゼロだったのに、こうして担当者と身分照会の会話を交わす短時間のうちに、すれ違うほぼ全員が彼女の顔を覗きこんでいくという激変ぶりだ。それも好奇心は半分で残りは敵意に近いきつい視線であった。なお『忌避者』は今年の流行語大賞受賞を確実に視されているらしい。

(挨拶代わりにバーンとパンチ飛ばしてきたじゃない)
吉成は表情にこそ出さないものの心の中ではそう苦笑い

するしかなかった。

「——ではバスが到着してますんで一緒にどうぞ。こちらです」

男性局員は中年だったがいたって腰は低い。

「おお、囚人護送者ですか。豪勢ですね」などと吉成が皮肉を口にしてもまったく動じる風がない。

「この服装ですか？ お騒がせします本当に。規則なもので付けざるをえんのです。まったく恐縮します」

しかしそう言いながらも、男は何度も道を間違えるベタな芝居をし、吉成をエントランス中に引き回しにする。途中、なかには彼女が吉成聖だと看破する者もいて、サインをもらいに近寄ってきもしたが、ここぞとばかり男は声を張りあげた。

「いけませんよ。これは少子国難法忌避者の連行ですから。皆さんの血税がかかった、れっきとした公務なのです。私的な会話や接触は自粛して頂いてます。忌避者こそ、脇目も振らず奉仕活動に従事してもらわないとなります。でないと真面目に教助所へ入っている皆様のご家族やご友人がどう感じられるか、想像してみてください。正直者が馬鹿を見る世の中にはしたくありませんよね！」

なんのことはない。これは立派な煽動だ。引き回しのうえ曝し者にして、国民全部を批判者の位置へ誘導しながら孤立感や疎外感を与えようとしている。賞讃と羨望の

人生を歩んできた芸術家への効果的な神経責めになるだろうと踏んでいるのだ。

男の狙いは半分は当り、半分は外れた。

通行人の吉成を見る目つきはさらに厳しいものに硬化したようだ。

だが彼女の表情には変化などなかった。反海猫派としての決意と誇りには一瞬の揺らぎもない。忌避者の『汚名』？ くだらない。そんなものが歴史のクズと化するのに、おそらく五年も必要としないだろう。自由と平等の逆行が短命に終わるのは世界史の必然だ。

吉成はきらきらと輝く黒髪を掻きあげながら背筋を伸ばして胸を張る。

「・・・吉成さん、頑張っって・・・」

いつの間にか出来ていた人だかりのどこかから、か細くはあるものの女性のしっかりとした声が聴こえた。若者だろう。

男性局員が慌てて声の主を捜したが見当たらない。濡れ衣を着せられては困るので人だかりはあっという間に四方へ散っていく。

男は舌打ちし、ほらこっちですよとようやくバスの停車場に吉成を導いた。

鮮やかなカウンターパンチを返せたとほくそ笑んだのも束の間、吉成の顔がまた意表をつかれたものに変わった。

そのバスがまるで護送車だったからである。

暗いグレーの車体にはやはり『忌避者3名乗車中』と張り紙されている。数字のところだけが差し替え可能になっていた。客室部分の窓には網戸が嵌っていて簡単には破壊できないような構造である、脱出も侵入も無理ということだろう。

つまり護送車なのだ。窓は完全に遮光されてはなく内部の人影がうっすら見えている。たしかに先客が二人はいるようだった。

バスの底部のトランクに荷物を入れるよう指示された吉成はバイオリンケースだけを手にして他はそこへ押しこみ、ステップを上がろうとする。

「残念ですが車内には持ちこめません」

男が柔らかく制してきた。

「これだけは管理に細心の注意を払わなければならないのです」

「理解できるのですが規則ですから」

「携行の許可は取っているはずですが」

「あくまで自由時間内の許可ということですよ」

「しかし・・・」

「皆さんにも守って頂いております。特別扱いするわけには、ちょっと」

「皆さん？」

「ええ、今回の忌避者のグループは全員、音楽関係の仕

事をされておられます」

吉成は渋々従うしかない。中古の練習機だがそれでも愛着のある代物だ。ケースを丁寧にトランクへしまった。

車内——先客は二人ではなく四人だった。

それでも数十人乗りの空間にその人数だからずいぶんひっそり閑とした印象である。

女が二人に男が二人。

二人の男もオレンジ色のベストを着ているので局員なのだろう。帽子も揃いである。

彼らは通路に立っており、向かい合わせに回転させたシートに座っている二人の女性を見下ろしている様子だ。

その女性達——。

年齢は二人とも二十代半ばから後半くらい。吉成と同世代と思われた。

一人は、茶色の混じるカーリーヘアが頭に弾けていて、黒フレーム眼鏡の無表情の顔で吉成へ会釈してきた。まったく化粧をしておらず、素っぴんのままである。黒の革ジャンに破れジーンズを履いている。

その向かいに座っているもう一人は、対照的に大人の衣服であった。グレーのスラックスにジャケット、中は白ワイシャツ。耳をすっかり露出したショートヘアが活動感を与えている。

清楚な化粧でくっきり見せている知的な目鼻立ちが吉成に微笑みかけた。

吉成は二人にお辞儀をして、カーリーヘアの隣に腰を下ろした。

局員の男の一人が咳払いをした。

「えー、この三名が今回の奉仕活動プログラムにおきまして、チームを作るメンバーということになります。これから十日間のクール、ほとんどの時間で集団行動を共にしていくことになりますので、一致団結の方向で、それぞれが向き合うことを希望します。では簡単に自己紹介をお願いします——」

その後、奉仕活動の内容について説明するという。

バスがゆっくりと発進した。

カーリーヘアの彼女は『森沢瑠奈（モリサワ・ルナ）』
といった。

年齢は26歳。川崎市在住。職業はシンガー・ソング・ライター。ストリート中心の活動らしい。

「ちなみにどんな感じの曲をお歌いになる？」と男性局員の一人がにこやかに尋ねた。

森沢はその男をじろりと睨みつけた。

「知ってるくせに。けっしてあなた達が好きにならないような歌詞だから、いの一番に赤紙を出したんでしょ、私のところへ」

「さあ、それは・・・。まあ誤解の多い部分ではありますが、誤解に止まることが多い部分でもありますな」

「何を言ってるんだかわかりやしない」

小声でそう言うと、森沢はそのまま横を向いてしまった。

対面の彼女は『坂上郁美（サカガミ・イクミ）』
年齢は27歳。横浜市在住。職業は高校の音楽教師。

「私が早々と赤紙をもらえたのは、きっと色々なデモに参加していたからでしょうね」

「いやいやそれもどうかと……。合法的なデモは市民の権利ですので、この件について不利や有利に働くことはないというのが真実でしょうか。剽窃は存在すると把握しておりますが、もしかして違法デモを覗いたことがおありで？」

「私に聞かなくともいいでしょう。海猫には007がワンサカいるんだし」

合唱部の顧問もしているらしく、笑い声もなかなかの腹式である。

なるほど。全員音楽関係の世界にいる女性達だ。

吉成が自己紹介すると、坂上は目を丸くし、窓外へきつい視線を送っていた森沢もこちらを振り向いた。

世界的な有名人が目の前にいることを二人は複雑な気分で確認する。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

007. 謎のNPO法人 嫁来い運動 ダーティな大御所

「——あのお、さっきのホイッスル、ちょっと見せてもらえませんか」

「・・・は？ それはどういうことでしょうか？」

「もしかして新製品ではありませんか。音を二種類、出せるような——」

男は急にそわそわしだして視線を背け始める。明らかに怪しい挙動だった。

「いいえ。通常のものですよ」

「金属音にマスクされていたけど、ちがう種類の音も出てたような気がする」

吉成はそう言って二人に意見を求める目つきをする。森沢がすぐに頷いた。

「そういえばイラッとくるような気分になったな」

「なったわね。私も——」坂上も人差し指を宙にさして同意した。「不快なノイズが混じっていたと思う」

二人の返答を受けて、当代一流のバイオリン演奏家は合点がいったようだった。

「お二人とも絶対音感の保持者のようですね」

シンガーソングライターも音楽教師も、アツという顔に

なった。

たしかにあのホイッスルの音には、絶対音感をもつ者だけが煩わしいと感じる性質の音が挿入されていた。まるでサブリミナル効果の瞬間映像のように、である。

「ホイッスル、見せて頂けますか？」と笑顔の吉成。

「・・・いやいや、これはいつも使っているホイッスルに過ぎません。お勘繰りなさらぬように」

「だったら見せればいいじゃん。確認くらいタダだろう」森沢がいきり立っている。

「・・・厳密にいきますと、これは施設管理権に属する問題なのでありまして、守秘義務が発生する部分でもあります。開示を遠慮させて頂くことは不当にはならないのです」

「法律を持ちだす必要あるかな——」前髪を指で弾きながら坂上が言った。「——これからも長い付き合いになるんだから不明な点があれば解消しておかないと。学級崩壊につながりますよ」

「・・・百歩譲って、そんな変な笛があったとして、じゃあそれに、どんな意味があるというんです。何をしようとするっていうのです。ナンセンスではありませんか」

「それはこっちが言う台詞だって」森沢はTシャツの胸の下に細い腕を組んでいる。

三人の追及に、局員は口裏を合わせて屁理屈を補完しな

がら拒み続ける。

吉成が再び口を開いた。

「私達とあなた達の間信頼が必要だと言ったのはあなた達です。言い出しっぺが真っ先にそれを踏み弄ったら、誰もリスペクトしませんよ。心しておくべきだわ」物静かな口調であるがオレンジベストチームを叩き伏せる迫力があつた。もちろん彼らは言を左右にしながら最後までホイッスルを見せようとしなない。しかし第一ラウンドはこちらの大勝利だと坂上は思った。さすがに国際級の音楽家の耳は我々とは造りがちがう。自分も森沢も一般人とは異なる聴覚を持っているが吉成聖は別格だ。あの金属音の裏に特殊音があると看破するとはハンパではない。おかげで局員達の『管理の方程式』の序盤作戦を大いに攪乱することが出来た。人間関係構築の主導権をこちらで握れば、大きなアドバンテージである。教助所のような収容所システムでなくとも海猫の洗脳力は油断できるものではない。彼らの拘束力が緩ければ緩いほど、短ければ短いほど、その危険性は薄れるのだ。公立学校の女教師は眩しいものでもそうするように、ロングの黒髪に縁取られたバイオリニストの美貌を見つめた。

バスはやがて、高勢祐光の写真——破顔一笑のバストショット——を大看板にして三階建ての屋根部分に取りつ

けた、NPO法人『ふるさと大家族興復マーチ』の本部ビルに到着するのだった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

008. ふるさと大家族興復運動に帯同しながら演歌の大御所に人生を学ぶ

「これはこれは世紀のバイオリニスト吉成聖さん！ あなたのような素晴らしい芸術家とご一緒して同じ汗を掻けるとは、こんな僥倖があるでしょうか！ 昨年の秋でしたか、あなたの出されたCD『ジャン・シベリウスのバイオリン協奏曲 二短調 作品四七』は素晴らしかった。この世のものとは思えない美しい音楽でした。どうかその世界一流の感性で、我が国の心の故郷にふりかかる過酷な現実を癒して欲しいものです！」

「——っ・・・」

唐突に演歌の大御所の口から自分の最新レコーディング演目が正確に出てきたものだから、さしもの吉成も虚を突かれたようになってしまった。高勢の真っ白に矯正された大粒の歯並びの印象が網膜に焼きついた。絶対音感

を掻き乱すノイズよりも厄介な強烈さである。彼の識見——ほめ殺し？——を跳ね返すためにも、吉成もまた高勢祐光の仕事のひとつでも言及すべきだったが、あいにく彼女には演歌界の情勢を把握する準備も関心も用意されていなかった。

「・・・恐縮です・・・」

そう呟くのが精一杯である。

おかげで高勢は吉成のほっそりとしているが筋腱の鍛えられたバイオリニストの指を数十秒ほど余計に握っていられたかもしれない。貴重な感触だっただろう。官能的ですらあったはずだ。

「——あなたもミュージシャンということだそうで」森沢瑠奈の両手を力強く握りしめる高勢。森沢は長身なので、小柄な彼は見上げなければならなかったが、少しの曇りもない笑顔を絶やさなかった。

「私なんかもご存知なんですか？」と目を丸くする森沢。

「いやはやさすがに路上ライブの観客として人だかりに混じっていたというわけではありませんが、動画サイトの動画は日頃からチェックさせて頂いておりましたぞ。○島みゆきの曲をカバーしたシリーズは絶品でした。ミュージシャン森沢瑠奈の本質はそこにある！ この道55年の高勢祐光がそう断言するのだから間違いありませんぞ！」

お前の本質は、けっしてメッセージ性の強いオリジナルソングの方にあるのではないと、言下に断じているのは明らかだった。

「演歌を歌いなさい。○島みゆきの本質は怨み節だからね。私の事務所でお世話してもかまいませんよ！」

そう朗らかに笑い飛ばす高勢。さっさと隣の坂上へ視線の矛先を移している。森沢の取りつく島はなかった。

「あなたの活躍も目を見張るものがありますな。坂上郁美先生！ 教職という、なかなか自由奔放には動けない身でありながら、人心と人心とを繋いで、共同体を墮落と荒廃から守るという音楽本来の役割を、将来ある若者達に伝えていらっしゃる。その情感豊かで勤勉な日常の奮闘ぶりこそ、今回の奉仕活動にぴったりの人材でありましょう。全身全霊で取り組んでいかれることを望みますよ。坂上先生を慕っている合唱部の面々も、きっとそう願っているはずです！」

それはちがう、と坂上は胸中で首を横へ振る。表現の温度差はあったとしても、部員達は皆、坂上が忌避者として徴用されることに反対していた。もちろん教助所へなぜ行かぬ？などという無茶な論法ではなく、少子国難法自体への懷疑と異議申し立てが根底にあったはずなのだ。高勢の見方は手前勝手な裁断だった。

「高勢先生におかれましては今年の○○歌合戦・・・」
坂上がキリリとした眉を持ちあげてそう言いかけた時、

高勢の後で影のように付き添っていた白髪の男性が持っていた紙袋から大きな台紙を取りだして大スターに手渡した。

「おー、これは美しい。美しい師弟愛だ——」高勢は柔和な笑みをたたえながら言った。「——あなたへの色紙ですぞ。坂上先生への寄せ書きだ」

A3並のサイズの色紙が坂上へ差し込まれる。

「——っ——」

女性教師は目を剥くしかない。合唱部全員の名前がフルネームでびっしり書きこまれている。筆跡も、見覚えのあるものが多く、おそらくすべて本人達のものと考えていいだろう。色紙の中央には赤マジックでこう書かれていた。

『坂上郁美先生、全身全霊で奉仕活動を頑張ってください！』

それが部員達の総意だとでも言いたげにデカデカと記されているのだ。しかし坂上はこれを納得するわけにはいかなかった。脅されてか、騙されてか、とにかく何らかの策謀により捏造されたものに決まっていた。何故そんなことを？ わかりきったことだ。坂上先生への『銃口』である。おかしい真似をすれば部員達に累が及ぶんだぞ、名前は全部掌握しているんだからな、というメッ

セージなのだろう。教員は教え子を質に取られれば弱いもの。しかも相手は秘密警察。軽率な行動も言動も取りうるものではない。

「○○歌合戦？」と高勢は白々しく首を傾げてみせる。

「その件について何かご質問でも？」

「・・・いえ・・・今年も・・・素晴らしいステージが見られたら嬉しいな、と・・・」

こんな言葉を選ばざるを得ないのは屈辱的だったが、とりあえずこうして様子を見るしかなかった。

高勢はすっかり上機嫌になり、改めて坂上の手を固く握りしめ、さらに勢いよく両肩をつかんで揺さぶりさえする。

「ありがとうございます！ あなたのような聡明な音楽関係者に理解され、支持されることは、勲章を授けられた気分になりますぞ！ この調子でお互い家族のように結束し、大事業に取り組んでまいりましょう！」

高勢の声はどこか憎めないボーイソプラノじみたハイトーンで、学校現場では、暴力的言動のモンスターペアレントだの権力亡者の教頭だの校長だの、海千山千の連中と渡り合っている坂上にしてからが、ずっと飲みこまれて時間を失念してしまう強いオーラを持っているのだった。

「ではマネジャーの板垣のほうから詳細についてご説明いたします、歩きながらで恐縮ですが時間も切迫してお

りますので」

そう言って、和服の襟を正すと颯爽と踵を返し、ボディーガードに先導させて廊下へと歩きだした。

ハッと我に返る三人だが、付いていくしか選択肢もない。

板垣と呼ばれた男が彼女達に視線もくれずに説明を開始する。

・・・高勢祐光を団長とする我々が今から向かうのは、某県某郡にある山村です。今月はここで興復マーチのイベントが開催されるのです。この村はこれといった産業もない、日本全国のどこにでもあるような過疎地帯です。ね、手をこまねいているなら早晩限界集落に転落し、共同体消滅の危機に瀕する状況です。先般、これを憂いていた村の有志が、近隣の村々とも連帯し、我々のNPO法人へイベントの興行を依頼する申請を提出、公平公正な審査のもと、受理されたため、可及的速やかに準備を進めた結果、本日いよいよ待望の瞬間を迎えたということなのでした。

・・・あなた方三人においては、このような事情を良く踏まえ、彼らの悲願にけっして水を差すことのないよう、厳重な自己管理・自己抑制に励み、イベントの成功に尽力してもらいたいところです。なおあなた方の言動行動は逐一チェックされ、数値化されて特務庁へ報告されるからそのおつもりで。

・・・ね、イベントの実際は集団見合いということですよ。共同体は家族の集合であり、家族所帯の形成が活発化しない限り、村の興復も有り得ません。家族の最小単位である夫婦の成立が急がれる所以はそこでしょう。すべての障害は崇高なその目標の下位にあたるのであるから、例外なく合理的に解決されなければなりません。都市部における女性の余剰現象は、人類の染色体の構造的不備により、もはや不可避の科学的事実と証明されており、これを是正する行為こそ全人類的幸福と持続の追求に他ならないのです。よって、ね、NPO法人『ふるさと大家族興復マーチ』は神の手の代行となります。結べる男女を結び、つがう男女をつがわせる。産み落とされる予定の子孫を万が一にも闇へ戻さぬよう、不断の努力を敢行しなければならないのです。

・・・さて、奉仕活動の内容は次の通りです。大きくはインストラクターの業務といえます。本日、山村へ向かう数十名の女性達の緊張を緩和し、見合いへ健やかに臨む環境を整えてさしあげるアシスタント、潤滑油となって頂くということ。ね、もちろん今日初めて招集されたあなた方に難しいことを要求するのはナンセンスであるわけだから、簡単に、イベントを盛り上げるキャンペーンガールを連想してもらってかまいません。旗を振り、バナーを掲げ、歌唱を披露し、楽器を奏で、愛を賛美し、妻になる喜びを鼓舞し、母になる使命を応援して頂

きたい。すでに三台のバスに分乗して待機中である彼女達の中には、あなた方忌避者を反面教師として認める者も少なからずいるかもしれないが、それならそれで結構という高い意識を持つことを希望します。ね、けっして自らを否定せずに、逆手を取って興復マーチに貢献すれば良し。なんであれ、ね、結果がそうであるなら奉仕の意義もある。あるいは大きな決断をして、自らのニューファミリーをここで獲得したとして、このイベントの大義に背くことはありません。なお忌避者が公序良俗に容認される段階を踏まえて婚姻関係を樹立したる場合は、忌避者への義務となっている奉仕活動を大幅に減免するという特例があることを再確認しておくものであります。・・・

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

009. 『ハラカラ音頭』 vs 『反海猫ソング』

今の騒動について、坂上は割り切れぬものを感じていた。どうも猿芝居を見せられたような気がするのだ。忌避者、とくに吉成を標的にした工作ではないか、と。結

果的に彼女は高勢の個人メイドの雑事をする成り行きになった。当初は『そういうことは出来ません』と強く言っていたのに係わらずだ。吉成もこれ一回きりと咄嗟に判断して板垣を助けたのだろうが、一度穿たれた穴は塞がるよりも広がっていくのが常識である。加えて、オレンジベストの査定が後押しするかもしれない。三人を分断するためにも好都合なのだろう。

聡明な吉成がわからない理窟ではないはずだが、板垣の真に迫った怯えの表情に、つい手を貸してしまったと思われる。

あんのじょう大先生の次に板垣へもお湯を注いだ茶碗をくれてやろうとする。海猫は彼女の優しい人間性を徹底してプロファイルしているのだ。

「ああ、どーもどーも——」

だが受けとったのは老秘書ではなく、横から手を出したカーリー頭の路上シンガーだった。

「やっば日本人はグリーンティだよね」

勝手にそう呟きながら、それを一気に飲み干してしまった。高勢の奸計により、出来かかった悪い空気を一掃するような、痛快な逆転打。自分なら男達への『一般職』を吉成にだけ受け持たせるのに、忸怩たる気分を感じ、

『情』に流されて、結局手伝っていたかもしれない。あるいはケンカ腰になって事をこじらせた可能性もある。森沢瑠奈の奔放なキャラクターだからこそ、あっさりと

成功したパフォーマンスなのだった。

坂上はミニバーセットを吉成から自分の手前に持ってきて、注いだ冷たい麦茶を吉成へ返杯した。自分の分は自分でつくった。流れさえ断ち切れれば、こんな行動も抵抗がない。人間の心理とはデリケートなものなのだ。

そう犀利に洞察する彼女だったが、さらにファイルのページをめくり、しきりにペンを動かしているオレンジベスト達の『評定』には気を取られる部分もなくはなかった。吉成は加点だろうが、私と森沢は減点だろう。それがどういう現実につながるのか、不安がないといえは嘘になる。隙を見せられない闘いがこのように延々と続けられるのだろうと改めて覚悟した。

「では現地に到着するまでに、この歌を歌えるようにしておきましょう。開幕式で歌うことになりますので」何事もなかったかのように、高勢はコピー紙を取りだして三人へ配った。

五線譜だ。

タイトルは『ハラカラ音頭』。

作詞作曲は『高勢祐光』となっている。

詞の内容は—————

だから子宝　これから宝　ハラカラ　ハラカラ　女から

だの腹宝

そして子宝 ここにも宝 ハラカラ ハラカラ だから
女は母からだ

タカラカ タカラカ どこから宝 ハラカラ ハラカラ
母のからだの腹玉手

アー、ハラカラ音頭でスッポンポン

さしもの森沢も絶句している。

なんとも能天気な表現で綴られているが『バカ歌』の体裁をとりながら深刻な時代錯誤を喧伝していた。

『子宝こそ女の人生』——テーマがそれなら、つまりR教のテーマソングではないか。

海猫時代に完全合致だ。

「皆さんは当然、初見でお歌いになれるのですよね？

凄いな。私はどうも楽譜というやつが苦手です。自分で作詞作曲しておきながら、そりゃないだろうと言われそうですが、歌は魂で歌うものと都合よく考えて、この55年間やってきましたよ」

尋ねてもいないことをべらべらと喋りながら、高勢はオーディオ装置のスイッチを入れた。サラウンドシステムのスピーカーから陽気なカラオケが流れてきた。手拍子付きの『ザ・音頭』といった曲調。これにマッチさせるために高勢は今日、この衣裳を着てきたのかと勘繰りたくなるほどだった。

憂鬱をもたらすことがまだある。

また絶対音感を刺戟するサウンドが混じっていたのだ。ジャンルを問わず、ほとんどの楽曲には含まれていないものなのだから、こうも続くと『珍しい』で片づけられなくなってくる。

「ではご一緒に！」

和太鼓とブラスセクションの前奏が終わる頃、片手で楽譜を持ち、片手で指揮をしながら、高勢は叫んだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

010. 糞拭き縄を挟みこむ巨尻・・・ナンシー・マクガイア、菅野彩

想像を絶する『歓迎会』のさなか、耐えきれず気絶した菅野彩は、すぐさま第三婦女収容所地下三階にあるβ監区——通称モグラ房——の最奥へと連行されたのだった。

意識は顔面への往復ビンタにより取り戻すことになった。

自分の目の前にいるのがそれまでの女監ではなく、二人

の制服男監であった事実に菅野はいまさら驚きはしなかった。

「色エンピツの分際で、手間取らせやがってよお」

若いほうがいきなり菅野の鼻を摘みあげた。

エンドレスで繰り返される暴力行為に、ゲンナリするしかない。

暴力が集中するのは、素っぴんでも汚れていても印象の変わらない美貌と、ニップルバンドを乳輪の真ん中に貼りつけられた若々しいFカップバストと、滋養を蓄えて丸々と発育した双臀とであったが、この男監達はその三カ所を容赦なく虐め抜くつもりのものである。

「お前の新居にブチこんでやるぜ。山小屋よりもずっと設備が整ってるから安心しな」

年長のほうがそう言うと、彼らはダイカンからほぼ全裸の女子大生を取り外していく。

「・・・うう・・・」

総身に走る鈍痛に菅野は足を踏ん張れずリノリウムの床へ倒れこんだ。

「シャンとしるシャンと！ 若さだけが取り柄の牝猿のくせしやがって！」

両脇から彼女の腕を抱えこみ、強引に上半身を持ちあげる。柔らかい双乳が垂れ、揺れ、弾んだ。

「甘えねえで自分で歩きやがれ！」

菅野のウエストよりも太いのではと見紛うほどの男監の

腕が、『404』と黒々書き殴られた臀球へ、激しく振り下ろされた。

武道で鍛えた硬い手の平と、女性脂肪で錬ったような尻肉の衝突は、苛烈な音を通路に響かせた。

顎の肉へまで伝わってくる痛みの波紋に、菅野は唇を開け放って悲鳴を叫ぶしかない。

しかし結局、鼠蹊部や膝に被ったダメージは著しく、一歩、踏みだすこともかなわなかった。

男監達にズルズル引きずられていくばかりである。

通路の両側には電子錠で閉じられた鉛色の合金扉が並んでいた。

「お前のスイートルームはあそこだけだよ。向こう三軒両隣の部屋に引っ越しの挨拶を済ませねえとな。これから気の遠くなるくらい長い近所付き合いになるんだ。礼儀はきちり通しておこうぜ」

年長の男監はお下げ髪の本一本を握り、ぐらぐらと揺さぶった。

「こっち隣にはお前よりもブス女が入ってるんだぜ」
電子錠にタッチすると、すぐさま男の声がスピーカーから聴こえてきた。

「オウ、お隣さんか」

「西洋白豚のご機嫌伺いにきたぜ。新入りがどーしてもって言うんだ」

まるでヤクザの会話であり、とても税金から給料をもら

っている人間のそれとは思えない。
静かな電子音が鳴り、施錠が解除される。
分厚い扉が開放されるや、通路へ向かって熱気の層がゼリーのように流れだしてきた。
ムツと顔面を押してくる空気の塊には臭気も混じっている。アポクリン汗は通常、腋の下から流れだすもので、老廃物やフェロモンを成分とするとても濃い体臭の大元だ。それが網膜を刺戟してくるほど含まれている。おそらく汲取式の便所の悪香も漂っていた。モグラ房の臭いなのだ。

菅野は顔を背けようとしたが、お下げ髪で顎を突きだす首の角度を強制されてしまう。

そのまま監房へと連れこまれた。

「————っ」

またしても、驚愕の映像が飛びこんできた。

およそ十畳間の広さの部屋は古畳が敷き詰められていたが、その隅っこには板間の部分があり和式便器が嵌りこんでいた。そしてその傍らに二本の杭が約五メートル間隔で立っている。高さは150センチ程度。杭の頂きを連結するように、ロープが張り渡されていた。泥を吸ったように暗褐色化した、しめ縄に近い太さのロープだった。それは五メートルより長いらしく、真ん中へかけてたわんでいた。

・・・そのたわみを跨いでいる女性がいるのだった。

鮮やかな金髪の持ち主で、白皙の恵まれた体格とともに、彼女の民族性がアジアやアフリカにないことは明確だった。

その上で、モグラ房の女囚と同一の——つまり菅野とそっくりそのままの——お下げ頭、ニップルバンド、前張りの三点セットだ。

ただし前張りは上縁を陰毛に粘つかせるのみで、ビラビラの状態ではある。

丸みを帯びた肉づきからして四十路周辺と思われた。

全身に不健康な脂汗を掻き、噛み縛った歯を剥きだしにして、爪先立ちの辛い姿勢を維持している。

両手は天井からぶら下がっている頭上の吊り革をつかみ、懸命に身体を持ちあげようとしていたが、腕の力は弱々しく、体勢を傾かないようにするのが限度のようだ。腋の下の無駄毛——少なめ——の供覧だけがその行為の結果であった。

股間に食いこませているロープは、少しでも膝を緩めれば、さらに残酷に陰部を抉るに決まっている。それは蠅が集るくらい不潔ですらあった。

女性は吹き出物の目立つ赤ら顔に力を凝集させたり、吐き抜かしたりして、苦悶の中にいた。

菅野を含む三人の来訪者にまったく気づいていないようだった。

「オウオウ、これが例のVIPの糞アマか」

「わりといい乳、持ってるじゃねえか」

男監は二人であったが、彼らは赤禪のみの裸である。一人はタオルを鉢巻きのように額に巻きつけ、女性の背後に立って彼女に罵声を浴びせている。もう一人は彼女の正面でロープを無慈悲に引き絞っている。彼らは顔だけをこちらへ向けて、菅野へ値踏みするような視線を浴びせてくる。

「へへへ、挨拶代わりにひどいことを言うじゃねえか。二十歳に毛の生えた程度で海猫様の寝首をかこうとした、お勇ましい巴御前だぜ。もっと敬ってやれよ」ひねこびた嘲笑が四人の鼻から吹きだした。

「みんな最初は巴御前なんだがなあ——」ロープを手繰っていた男監が言った。視線を菅野から年齢にそぐわぬ三つ編みヘアの白人女性へ向ける。「——この西洋白豚だって娑婆では大活躍だったじゃねえか。世界を股に掛けて、我が国にも乗りこんできて、喰えない要求ばっかまくしたてやがって、大威張りだったが、ケツが割れて捕確されちまえば、この通り、いまや股に挟むのは糞拭き縄よ。これでゴシゴシやるのが快感みたいな変態女の本性、大暴露だぜ」

男監はロープをいきなり高く持ちあげた。

「・・・アアアア・・・」

疲れきった悲鳴がその女性から洩れ溢れる。

以下は有料本編でお読みください。

#####